

## サムエル記下 9 章 1～13 節

2025 年 8 月 27 日(水)

はじめに

前回のサムエル記下 8 章では、ダビデが王国の基礎を固めました。イスラエルに脅威を与える周辺の諸民族と戦い、制圧し、ダビデの王権が及ぶ範囲を確定したのです。

それを受けて本日の 9 章では、「では、かつてダビデに敵対していたサウル家の生き残りのメフィボシェトの運命はどうなるのか」そのことを語ります。世俗の王国の場合には、前の王の生き残りは滅ぼすのが普通です。反乱を企てるかもしれないからです。では、神によって建てられた王国であるイスラエルの場合は、どうなのか。そのことを問題にしているわけです。ここでも世俗の王国と神によって立てられたイスラエル王国との対比が意識されています。

なおサウル王の子供たちの運命は次のとおりです。存命しているのは○、不明は▽。

長男ヨナタン：ギルボア山の戦いで討ち死に⇒ I サム 31:2

次男アビナダブ：ギルボア山の戦いで討ち死に⇒ I サム 31:2

三男マルキ・シュア：ギルボア山の戦いで討ち死に⇒ I 31:2

四男イシュ・ボシェト：サウル王家の後継者、

ベエロト人リモンの子レカブとバアナに暗殺される⇒ II サム 4:5

▽長女メラブ：メホラ人アドリエルに嫁がせられる⇒ I サム 18:19

○次女ミカル：ダビデの妻⇒ I サム 8:2、I サム 25:44、II サムエル 3:14～16

○ヨナタンの子：メフィボシェト 5 歳の時に両足をケガ、以後、両足が不自由⇒ II サム 4:4～5

以上のようにサウルの子供たちは死去し、孫であるメフィボシェトだけになったわけです。このメフィボシェトの運命が問題になるわけです。

## I サムエル記下 9 章 1～13 節の話の流れ。

本日の個所の話の流れを見てみましょう。まず 1 節でダビデはサウル家の生き残りの者があるかどうかを尋ね、ヨナタンとの契約のゆえに、その者の保護をいつています。これは、誰にいったのが書いてありません。文脈から考えると、ダビデ王の重臣たちに向かって語ったのでしょう。彼らは反対していませんから、ダビデのこの命令は公式見解となったわけです。

それを受けて、2～5 節では、ダビデはサウル家の家臣であったツィバにサウル家の生き残りについて尋ね、ヨナタンの子メフィボシェトが存命していることを知らされると、彼を連れて来るようにと命じています。ツィバは、それに従い、メフィボシェトを連れてきます。

6～8 節は、ダビデとメフィボシェトの会見の場面です。ダビデは彼にサウル家の後を継がせています。

9～11 節後半は、ダビデとツィバの会見の場面です。ダビデはツィバにメフィボシェトに仕えるように命じています。

11 節後半～13 節は、結びです。メフィボシェトは、ダビデの食卓に連なる者とされ、エルサレムに住みました。ツィバの家のもものはすべてメフィボシェトに仕える召し使いとなりました。

以上を箇条書きにすると、次のようになります。

1 節 ダビデのサウル家の生き残りに対する保護命令

2～5 節 ダビデ、サウル王家の家臣だったツィバにメフィボシエトを連れてくるように命じ、彼はメフィボシエトを連れてくる。

6～8 節 ダビデとメフィボシエトの会見。ダビデは彼をサウル家の後継者と認め、保護を約束する。

9～11 節前半 ダビデとツィバの会見。ダビデはツィバにメフィボシエトに仕えるように命じる。

11 節後半～13 節 メフィボシエト、ダビデの食卓に連なる者とされ、エルサレムに住む。  
ツィバの一族は、メフィボシエトに仕える者となる。

## II. サムエル記下 9 章 1～13 節の解説

### 【1 節】

ダビデは次のように布告します。「サウル家の者がまだ生き残っているならば、ヨナタンのために、その者に忠実を尽くしたい。」

このダビデの言葉は、ダビデが王国の領土を平定した段階でいわれました。つまり王国に脅威を与える周辺民族を制定し、王国の基礎が固まったときにいわれたわけです。

ところで、すでに触れたように、この言葉は誰に向かって語ったのか明記してありません。おそらくダビデの重臣たちに語ったのでしょう。重臣たちはダビデの考えに異議を唱えたり反対したりしていません。ですからこの 1 節は、ダビデの王国の公式命令ということになります。

では、ダビデの重臣たちは、何故、この命令に異議を唱えなかったのか。世俗の国家の場合、先王の生き残りは処罰されたり、滅ぼされたりしました。それはもちろん反乱を企てないようにするためです。特に先王サウルはダビデの命を狙った敵対者でした。しかしダビデも家臣団も、世俗の王国のようにサウル家の断絶を考えず、サウルの生き残りを保護するというのです。それはどうしてなのか。それは、「ヨナタンのために」とあることから分かります。

ダビデの保護命令は、もちろんダビデとヨナタンの個人的な友情に基づくものです(I サム 18: 1, 3～4、II サム 1:26)。けれどもそれにとどまらず、ダビデとヨナタンは契約を結び、互いに助け合う約束していました(I サム 20:22～23, 42)。それは神の御前でなされた契約ですから、ヨナタンの死後も有効です。ダビデは、この契約にもとづいてヨナタンの遺児の保護を命じたわけです。

しかもダビデは、彼に「忠実を尽くしたい」といっています。この「忠実」と訳されている言葉は、「ヘセド」で、この 9 章では 1 節(忠実)、3 節(神に誓った忠実)、7 節(忠実)と三回繰り返し出てきます。意味は、「神の恵みや人間の恵み、慈愛、慈しみ、好意、慈善」ですが、もともとは「契約にもとづき愛すること、契約愛」という意味です。ですからダビデの保護命令は、彼の個人的な友情にもとづくだけではなく、神の御前での契約にもとづくものです。ダビデの家臣団は、こうしたことを十分承知していたので、この命令は王国の公式命令となったのでしょう。

### 【2～5 節】

そこでダビデは、ツィバという者を呼び出します。彼は、サウル家に仕えていた者でした。ダビデは彼にサウル家の生き残りがいるのかどうかと尋ねました。そして生き残りの者に保護を与え「忠実を尽くしたい」というのです。そこでツィバは、ヨナタンの遺児メフィボシエトが存命であること、またその者の両足が不自由であることを告げました。尚、両足の「萎えた」は「ネケヘ」

の訳で、「不具の、肢体不自由の」という意味です。新共同訳の「萎え」は、口語訳の「あしなえ」を引き継いだものでしょう。ともかくダビデは、ヨナタンの遺児が存命していることを知ると、間髪を入れず、その者がどこにいるのかと尋ねます。

ツィバは、その者がロ・デバルにあるアミエルの子マキルの家にいると答えました。ロ・デバルはヨルダン川の東岸北部の都市でエルサレムから直線距離で約 112 キロ、そこに住むマキルは豊かで、後にダビデを支援しています(Ⅱサム 17:27)。ダビデは、メフィボシエトが足に障害をもつため、「人を遣わし」エルサレムまで連れて来ました。ツィバは、メフィボシエトにダビデ王の気持ちを話して説得し、彼をロバに乗せるか、輿に座ってもらって運ぶかしたと思われるから、おそらく三、四日かかったことでしょう。

#### 【6～8 節】

こうしてダビデとメフィボシエトの会見となります。まずメフィボシエトは「ひれ伏して礼をし」、ダビデがイスラエルの王であると認めていることを態度で示しました。ダビデは彼の名前を呼び、彼は「あなたの僕です」と答えています。

そしてダビデは、まず「恐れることはない」と告げます。サウル家を断絶させるようなことはなにも一つ考えていないということです。そして「あなたの父ヨナタンのために、わたしはあなたに忠実を尽くそう」と明確にっています。

その「忠実」とは、具体的に、第一に「祖父サウルの地所はすべて返す」ということです。つまりメフィボシエトをサウル家の後継者として正式に認めた、ということです。

また第二に「あなたはいつもわたしの食卓で食事をするように」ということです。これは、10 節、11 節、13 節で繰り返しいわれていますが、メフィボシエトをダビデ王家のメンバーの一人と同じように扱うという意味です。

それに対してメフィボシエトは「僕など何者でありましょうか。死んだ犬も同然のわたしを顧みてくださるとは」と答えています。彼は自分を死んだ野良犬に譬えたわけです。単なる謙遜ではなく、サウル家の没落を背景にした言葉です。

#### 【9～11 節後半】

次に、ダビデは、メフィボシエトの会見の場に、ツィバを呼び出しています。そして彼にも、サウル家はメフィボシエトが正式に相続すること、また彼はダビデ王の食卓に連なることを告げます。またツィバとその一族はサウル王に仕えたように、メフィボシエトに仕えるようにと命じています。しかも具体的にサウル家の土地を耕し、収穫を上げ、ヨナタンの子息であるメフィボシエトのために生計をたてることを命じたわけです。これは、もちろんメフィボシエトが障がい者であるためです。それに対してツィバはダビデの王命を間違いなく実行することを約束しました。こうしてダビデ王の支配の中で、サウル家も存続するようになったのです。つまりサウル王の支配の中ではダビデ家は存続できませんが、逆にダビデ王の支配の中で、サウル家も存続できるのです。

#### 【11 節後半～13 節】

ここは一連の会談の結びです。メフィボシエトはダビデ王の食卓に連なる者になりました。もちろんダビデは、会食の度に、メフィボシエトのうちに亡き友ヨナタンの面影を見、さらにサウルの面影を見たことでしょう。またダビデの妻ミカルも、普段は後宮にいますが、王の会食に連なることがあったかもしれません。彼女もまた慰めを得たのです。

またツィバとその一族は皆、メフィボシエトの召し使いとなったといわれています。ダビデと

敵対関係にあったサウルとその家は、今や、ダビデの保護の中で存続することになったのです。こうした一連の働きは、戦争という激動をとおしても変わることのないダビデとヨナタンの契約に基づくヘセドの働きによることなのです。ここに、世俗の王国との違いがあります。神が建てたダビデの王国は、権力欲によって衝き動かされるのではなく、神の御前でなされた契約への忠実さによって動いているのです。したがってわたしたちは、9 章をとおしてヘセドを見ているのです。

新約聖書との関連では、9 章の一つひとつの言葉がキリストを予告しているとはいえませんが、9 章全体がヘセドを語っているという意味で、イエス・キリストを予告しています。キリストはヘセドを完全に体現している方だからです。

したがってまた、わたしたちはメフィボシエトがダビデ王の食卓に連なったように、永遠の王であるイエス・キリストの食卓に連なります。それが、主の晩餐であり聖餐なのです。